



## お客様視点を持つこと、 企業市民として 社会に貢献すること

富士重工業株式会社  
代表取締役社長

森 郁夫

スバルはこれまでクルマ造りの基本を、「走りを楽しめれば安全になる」との思想のもと、レガシイに象徴されるドライバーズカーとしての走りの良さを高めることを中心に取り組んできました。具体的には「走る」、「曲がる」、「止まる」をしっかりと造りあげることであり、その最大の特徴が独自の水平対向エンジンとシンメトリカルAWDです。この結果、多くの自動車ブランドがあるなか、自らステアリングを握って運転を楽しまれるお客様を中心に一定の評価をいただけるようになりました。

一方で、環境問題を中心に自動車を取り巻く社会状況が大きく変化している今日、これまで以上に積極的にお客様の視点に立ったクルマ造りを進め、また企業市民として社会に貢献していくことが、企業としてブランドとして求められていることと認識しています。



レガシイ

この考え方を私たちの商品に当てはめてみれば、スバル車はその「走り」について語られることが多いのですが、それは「安全」、「環境」と三位一体になったときに初めて意味を持つと考えます。

高次元の「安全」を確保した上で「走り」を極める一例として、世界ラリー選手権 (World Rally Championship: WRC) への挑戦と、その技術ノウハウの量産車へのフィードバックがあります。量産車と同じ基本構造の競技車両で、極寒の北欧から灼熱の高地まで地球上のあらゆる公道を使用するWRCは、まさに走る実験室であり、スバルは1990年に初代レガシイでWRCに参戦して以来、連続17年に亘ってWRCに挑戦し続けています。その間、インプレッサによるWRC3年連続メーカーチャンピオン取得という輝かしい記録も達成することができました。おかげさまで今では世界のWRCイベントでスバル・ブルーのウェアを身に付けた多くのファンのみならず熱心な応援をいただけるようになりました。

また環境性能を向上させながらも、様々な使用状況下において自らの用途に合わせて積極的に運転を楽しむことのできるシステム「SIドライブ」を開発し、2006年5月から新型レガシイに搭載を開始しています。具体的には、市街地走行などでの扱い易さと優れた実用燃費性

能を実現するモードから、スポーツ走行を積極的に愉しめるモードまで3つの制御モードを運転者が任意に切り替えることで、1台の車で3つの異なる走行性能を愉しむことを実現するシステムです。

これにより必要なパワーをその時々に応じて味わいながらも、燃費の向上を果たしています。

「環境」へのさらなる対応ということでは、スバルは近い将来の実現可能な「環境」技術の開発に積極的に取り組むことでお客様、社会の信頼に応えていきたいと思っています。

その一例として、リチウムイオンバッテリーを搭載した電気自動車スバルR1eを東京電力(株)様と共同で開発し、現在、公道を使用した実用試験を行っております。このR1eは今までの電気自動車の弱点であった充電時間の長さを克服し、急速充電器の使用によりわずか15分でフル充電時の80%まで充電可能な性能を持ち100km/hの最高速度とガソリン車を凌駕する加速性能を持つ、優れたシティコミューターです。

既に東京電力(株)様へこの6月に10台を納入し、二酸化炭素などの排気ガスをまったく出さない業務用車として街中を走り回っています。今後はさらに市販化に向けての様々な課題を、あらゆるチャレンジで克服し、量産に向けて開発を継続していきます。

リサイクルに関しては、スバルでは2005年に施行された自動車リサイクル法にもプロジェクトチームを設置、このチームでは解体しやすい部品、車両の研究、リサイクルしやすい部品の構造と材料の研究を行っています。



電気自動車スバルR1e

昨年度(2005年度)の実績としてシュレッターダスト再資源化率を自動車メーカートップの70%という高い数値とすることができました。これは2015年度法定基準を早くもクリアしていることとなります。

今後もこの高い水準を安定的に維持、向上させるようリサイクルのさらなる効率化と、ユーザー負担低減のための低コスト化を目指していきます。

生産面においては、日本でのスバル車生産拠点すべてでISO14001を取得し、廃棄物ゼロを達成しているのみならず、北米のスバル オブ インディアナ オートモーティブ インク(SIA)においても、1998年にISO14001を取得、2004年に廃棄物ゼロを達成、と、どちらも米国の自動車工場初となる先進的な取組みを進めています。

このように私はスバルを、今までのクルマとしての良さを継承しつつ、「お客様視点」を持ち、「企業市民としての責務を果たす」会社にしていきたいと考えています。

このため、まずは私自身から積極的に現場に出向きたいと思います。開発現場、製造現場、販売現場、それぞれ現場は生きていて、現場にこそ答えがあると思っています。現場の声を吸い上げ、「お客様のために」「社会のために」行動していきます。

そしてスバルのより良い提案で一人でも多くの方が幸せを感じていただけたら幸いです。

どうぞ今後も自動車殿堂にたずさわる皆様には引き続きご指導、ご鞭撻をいただけますようお願いいたします。



SIA正面入り口